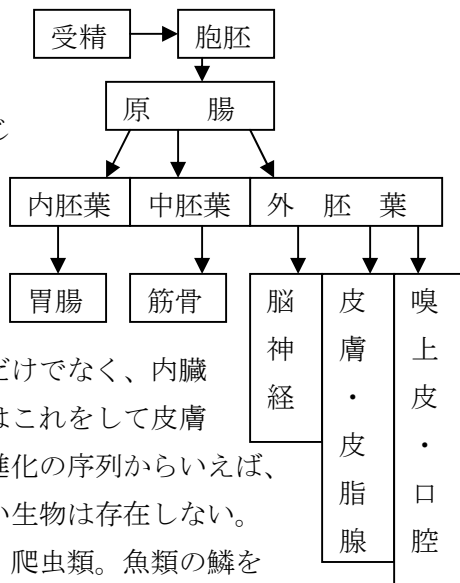


—自我の座としての皮膚—

はじめに；日常慣れ親しんだ皮膚・・・。単に、外界と体の境界をなす死んだ組織としかみなしていない。しかし、最新の皮膚科学の教えることによれば、皮膚は、脳と同様、否それ以上の高度な情報処理組織である。通常思考知覚の中心は『脳(神経系)』とされるが、既によく知られているようにこの『脳』と同じ発生母胎(外胚葉)を同じくするのが『皮膚』である。いうなれば皮膚は脳と(同源異枝)の関係にある高度知覚器で、『外脳』といってもよい。



要するに、私たちは、単に脳で感じ、思考するだけでなく、内臓(消化器)と皮膚で感じ、意識する。ある研究者はこれをして皮膚を(第3の脳)と称するが、生物進化の体発生の進化の序列からいえば、実際、脳を持たない生物があっても皮膚を持たない生物は存在しない。ヒト皮膚の原型はカエルの皮膚にすでにあらわれ、爬虫類。魚類の鱗をえて鳥類では羽毛(鳥類の羽毛構造は、ヒトあるいは哺乳類の皮膚に近い構造をもっている)、ヒトでいう角層に変わる。つまり、脳は皮膚—知覚器官の発生以後生まれたものであり、脳は、皮膚が高度に特殊化したものともいえるだろう。そこでかりに知覚の座を広義の(脳)とすれば、**第1脳(原脳)は『内臓』で第2の脳(古脳)は『皮膚』、第3脳(新脳)は脳神経と呼ぶべきであろう。**いうなれば、思考知覚は全身で営まれる。しかし現代の精神科学は唯脳論で、これでは人(自我)の本体をつかむことはできない。

実は、こうした皮膚の本性は既に古くから知られていた。例えば

『**虚実(物事の化相実相)は皮膜の内にあり**』とは近松門左衛門の芸術観の要諦としてよく知られているがこれこそ**皮膚の本質表現**である。

しかし、最近では、この**外脳的皮膚の更なる機能**が科学的に明らかにされつつあり、これは、伝統的な東洋医学皮膚理論と軌を同じくしている。こうした動向は、特に、東洋系自然医療の按摩・針灸・整体・美容術は、皮膚を介して治療するものであり、その重要性もますます再認識されている。また現代医学介護の分野でも皮膚の心身ケア効果は最重要課題となりつつある。こうした諸課題解決の視点をあきらかにするために、改めて**古今の皮膚論の要点**を学習することは喫緊のテーマとなる。

皮膚—脳論(古脳説)の最新の根拠

1、角質(ケラチノサイト)に関して

a、 β ・エンドルフィン皮膚合成説

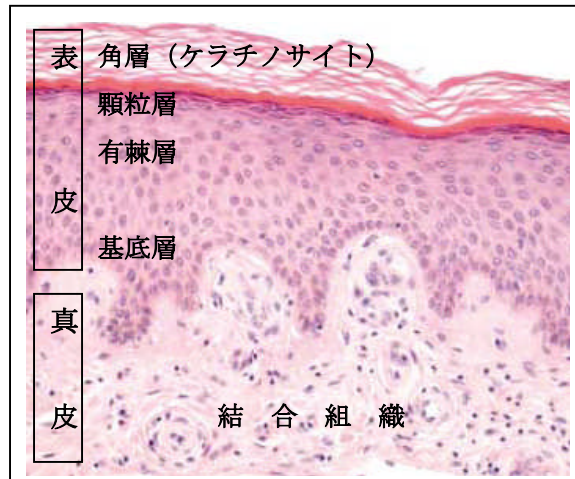
先に皮膚・脳が同源異枝であることは述べたがこれは現在の皮膚そのものが脳レベルの機能を持っていることの直接証明にはならない。しかし、近年、皮膚の諸研究とくに表

皮ケラチノサイト細胞層の研究から、

文字どおり『皮膚は思考する』ことがわかりはじめています。

その証拠の1つに、 β ・エンドルフィン皮膚合成説がある。

すでに近年、角質（ケラチノサイト）（右図）は、神経情報伝達物質の一種であるL-ドーパ、ドーパミン、ノルエピネフリン、エピネフリンなどの物質代謝を営むことが分かってきたが、いわゆる角化サイクルもこうした複雑な神経伝達物質の代謝系によって営まれていることとなる。



さらに、驚くべきことに、最近（1999年）従来、脳内だけに存在するとされた神経ホルモン『 β ・エンドルフィン』が表皮（角層）において合成分泌されていることが明らかになった。つまり、表皮と脳は上記の神経伝達物質によってリンクしあって体内のホメオスタシスを維持するだけでなく、皮膚自体、**脳と独立した知覚・意識・思考作用（特に、暗黙知・直観知）を維持する可能性**が示唆されている。

β ・エンドルフィン

脳下垂体中葉・後葉に多く含まれ内因性モルヒネ様ペプチド（オピオタイドペプチド）の一種。脳下垂体の副腎皮質刺激ホルモン及びメラニン細胞刺激ホルモン（MSH）と共通の前駆体タンパク質（POMC）から生合成される。鎮痛作用や抗ストレス作用を有し、脳内快樂物質として知られている。

また、この物質は、単に脳とリンクするだけでなく当然ながら、以下のように皮膚の生理作用にも関与する。

1. ケラチノサイト・繊維芽細胞、皮膚免疫の促進
2. 唾液中のストレスホルモン（コルチゾル）の減少
3. 炎症緩和、鎮痛、脂肪細胞分化を抑制
4. 美白作用（メラニン色素還元）

β ・エンドルフィン作用物質

ハーブ系：ローズ水、ラベンダー、カモミラ、アツケシソウ、ヘリクリサム

食品系：米ぬか、とうもろこし、小麦、コンニャクイモ、きのこ

b、セラミド皮膚合成説

セラミドは、最近皮膚科学で注目されている保湿バリア成分で、表皮細胞の角化の過程で

生成されるが、本来は、神経組織物質で、脳神経組織でとくに**神経鞘（ミエリン鞘）の構成物質として重要な働き**をしている。

最近の研究では、単に神経鞘の構造維持だけでなく、**情報伝達物質として作用する機能が注目**されている。おそらく角質化もこのセラミドの機能が関与しており、もし、セラミドの合成障害が起こると皮膚の新陳代謝が失調し、アトピー性皮膚炎などの皮膚障害を生じうる。つまり、皮膚機能を維持するためには、血管新生、その循環作用や**神経機能の維持**も重要な問題となる。とくに神経細胞の再生や機能維持を司る**神経栄養因子の生合成および分泌作用**が重要となる。

セラミドの細胞シグナル伝達物質として、分化、増殖、プログラム細胞死(PCD)、アポトーシス（タイプI PCD）を制御することがよく知られている。この機能のため、セラミドはしばしば「細胞死のメッセンジャー（messengers of cell death）」と呼ばれる。

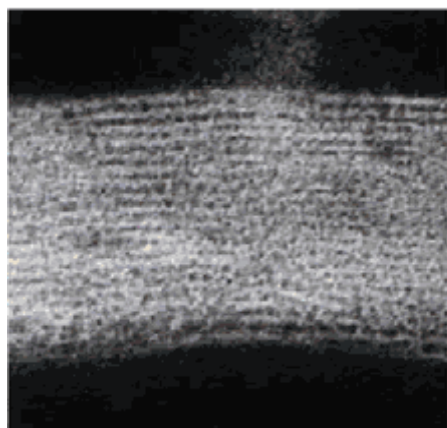


図5 細胞同脂質の電子顕微鏡写真

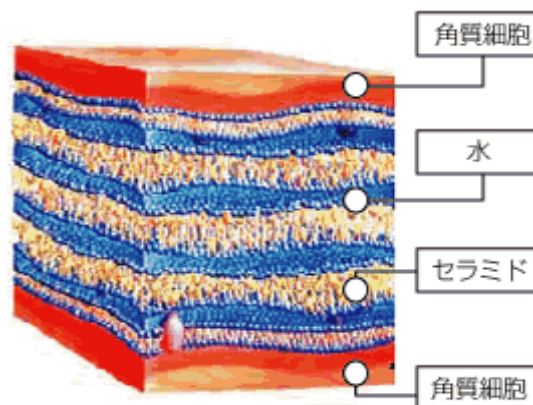


図6 セラミドによる脂質二重層構造（モデル図）

セラミドは、また、加齢とともに角層内のセラミド量は減少する²ため、高齢者ほど皮膚が乾燥しやすくなる。

セラミドの合成機能の活性化

セラミドの皮膚生理的許容量・合成代謝は複雑な酵素系で維持されている。機械的に合成セラミドと外部から塗布してはならない。あくまで皮膚本来の代謝機能状態を賦活することがのぞましい。これにはハーブ系のセラミド合成賦活機能を

もつものを用いるのがベスト

ユーカリ抽出液、米胚芽オイル、ローマカミツレエキス”、“チャ葉エキス”、“スベリヒユエキス”（例えば、角層でのセラミド代謝系において、ユーカリ抽出液を加えることによって、セラミドの増加とともにスフィンゴシンの減少と、グルコシルセラミドの増加が確認されている。）ました。

また、このセラミド効果を促進させるのにラフィノース、トレハロースなどの天然の保湿糖がある。これはセラミドの二重構造（ラメラ構造）を安定化させる効果がある。

c、角質免疫説

すでに表皮中（p 2）の顆粒層（ランゲルハンス細胞）が免疫応答機能を有することは分かっているが、最近、**角質**に多種の+帯電抗菌ペプチド（一種の生体由来抗生物質・白血球走化性促進）を合成分泌能があり、これによる二次細菌（A 群溶連菌）/真菌感染（カンジダ）を防御する働きがある。（米・d r、Peter Elias ら）

この角層の抗菌ペプチド能は、**血中副腎ホルモン（糖質コルチコイド）量に相関し、その増大は結果的に抗菌ペプチド分泌が減少し、皮膚障害を起こしやすくなる。**逆に、副腎強化により皮膚防御力は間接的に強化される。また、これは細菌感染に限らず、重度皮膚症状をおこす単純ヘルペスウイルス（HSV）にも有効であろう。

また、興味あることに、この抗菌バリアーは絶えず働いているわけではなく、皮膚の水分量と相関関係がある。ある実験によると、皮膚の防水のある物質（鉱物油）で覆うとこの抗菌防御は働かない。このとき多孔性、水溶性の保護膜（植物オイル、ジェル）を塗布すると抗菌力が働いてバリアー機能が回復するという。以上のことから、抗ストレス=抗菌力の公式が成立している。ストレスで皮膚の抗菌能が弱まる

したがって、ハーブ系成分の抗菌薬には、それ自体抗菌作用は弱くても、副腎を強化すれば角質の抗菌物質分泌能を促進させて、皮膚防護する働きがあるものと推定される。

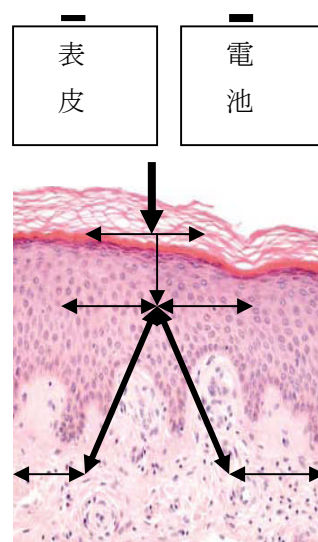
+ + 例えば、テルペン系アルデヒド類、ケトン類を多く含む精油（例ペパーミント、ローズマリー、レモングラス、セージ等）やプロポリス、キムチ醗酵液の多くは 糖質コルチコイド分泌抑制（漢方でいう清熱解毒）がありパラベンなどの殺菌剤の代用の可能性がある。

2、表皮多電池構造説（ポリモーダル説）

p 2 図の表皮層は多層構造になっている。これは最近の皮膚電位の研究から表皮自体蓄電池の構造作用を持っていることが解明された。これは、脳細胞が脳電磁派（脳派）を発生するように、皮膚も独自の皮膚電磁波を発生していることを意味する。これは、細胞自体が1つの電池構造（ダイポール）をもっているから表皮組織が同様な構造を持っていても不思議ではないが、表皮には多数の細胞があるので、いわば多数（ポリ）の細胞電池の綜合作用（モーダル）が問題となる。

いいかえれば、皮膚は単純に外界の刺激を伝える媒介組織でなく、その刺激を統合し、他組織にマルチ

チャンネル的に伝達して、皮膚独自の情報システムを形成している。さらにいえば、この皮膚情報システムには脳及び内臓細胞からの電磁的情報のリンクがあるからここに皮膚—内臓—脳の大ネットワークが形成されている。これは恐らく、**東洋医学の経絡**である。



「自我感覚」の発生基盤としての皮膚—特に第2の皮膚としての衣服と自我

自我感覚とは、哲学的意味に深入りせずいえば、自己と非自己の区別感覚、いうなれば「私」という感覚にほかならない。この感覚の生理基盤は皮膚の触覚「圧覚」からうまれる。もし皮膚から触圧感覚がうしなわれると自我感覚は脆弱化する。

実際、あらゆる感覚を遮断した実験（アイソレーション・タンク実験）では、自らの意識が肉体から離脱する感覚になる事例が報告されている。これは「自我」感覚の形成には体性感覚が不可欠であることを示唆している。これに関連して、面白いことに、視覚・聴覚情報が遮断されても、触覚さえあれば、自我感覚は維持されるという事実である。これは恐らく、触覚が自己・非自己認識の基盤感覚であることの証明であろう。これを整体学的に言えば、触覚は皮膚—皮膚筋を介して骨格筋の反射にかかわるところから、人の姿勢制御（重心バランス）情報のインターフェースであるから、人の自我感、実は自分の皮膚感覚—姿勢—体存在の連鎖反応から成り立っていることがわかる。要するに、人が「自分自身」を認識するには皮膚入力が必要不可欠である。

皮膚は、身体的なものだけでなく心的なものを内部に保つ、言い換えれば自分を維持し個別性を保つ保証保護装置となる。

これは大変重要なことで、医学のみならず哲学思想心理芸術などあらゆる分野での重要点である。

医学的にいえば例えば、西欧近代の人智学者R・シュタイナーは『病気は自我統制の逸脱』と結論つけたが、これを皮膚自我的に言えば、『病気は皮膚自我感覚の失調』といいかえられる。これは、病気つまり気（精神）を病む状態（とくに精神病患者において）における皮膚感覚反応（皮膚病—皮膚筋硬直症）に顕著にあらわれる。

例えば、精神病患者における重ね着症候というのがある。これは統合失調症（精神分裂症）の事例で比較的小おくみられるが、その理由はまだよく解明されていないが、恐らく、自我分裂—皮膚機能低下の文脈で解釈可能であろう。つまり皮膚は自分そのものであるがその自己が崩壊すること傷ついた自我機能を重ね着で防衛しているのではないか？このとき、重ね着を冷笑、阻止することは逆効果で、患者自らが自我機能が修復される様援助することが周囲（看護者）の役割であろう。

この衣服と精神の関係事例は、単に統合失調症の患者の特異な症状ではなく正常な人にも当てはまる。例えば、服をまとう動物は人間以外にいない。なぜヒトは衣服を纏うのか？それも様々な色・形で。単に生理的な保温のためでないことははっきりしている。これは人はなぜ化粧するのか？という問題と同軌であろう。

これはヒト特有の自我の問題と深くかかわっている。

つまり衣服・化粧は第2の皮膚にほかならず、まさに皮膚-自我の関係から必然的にうまれるヒト特有の精神現象である。したがって、これを抑圧画一化することはヒトの

無機化・機械化の意図につながる。(例、中国/北朝鮮の人民服、西欧のアメリカのネクタイ)、また、最近の流行ファッションにしても、特定のデザイナーが演出したもにではなくそのようなファッションをもとめる集団自我の片影にすぎない。これを冷笑し、拒否することはたやすいがそれだけではその社会学的意味を汲み取ることはできない。

「スキンシップ」における顔の問題とはなにか？

人と哺乳類の皮膚の決定的な

ヒトの顔は、魚類の口腔の内側が外に捲れ出したような形で形成される。譬えれば「脱肛」のようなもの-とこれは三木成夫「脱肛」説なるものだが、その平面状の顔に、視覚や聴覚、味覚センサーが配置され、端には聴覚センサーが並ぶように集約される。ヒトの顔-三木成夫の「脱肛」説

「顔に毛がない」理由は、感覚四種-眼・鼻・口・耳-が集まった場所で、もう一つの感覚「皮膚感覚」を高めるため、ではなかったか。

「はだかの理由」-「ヒトは全身を顔にした」-ヒトは毛をなくしたことで、スキンシップ-肌の触れ合い-という新しいコミュニケーション手段を獲た。スキンシップによって、ヒトは進化の新しい階段を一步上がったのではないか。

有毛のヒトの祖先が、いきなり衣服をまとったとは考えられない。まず、裸でも生存できる温暖な環境で、ヒトは全身の毛を失ったのだろう。そしてその代償にスキンシップという新たなコミュニケーション手段を獲た。そして高度な組織性を獲得したヒトは、他の動物たちより優位な立場を得た。さらに環境に敏感になったヒトは、次第に生息域を拡張、寒冷地を目指したものは衣服を発明し、さらに新しいコミュニケーション手段として言語も発達させた。

言語の定義を「適切な音声を使い分けることによる同種間コミュニケーション」と広義に解すれば、哺乳類はおろか鳥類にさえも見出しうるものである。しかし、皮膚刺戟によるコミュニケーションは、霊長類において頻繁に認められるもので、このためには細かな皮膚への刺戟に対して手の機能の発達が欠かせない。

広義の「言語」より「肌の触れ合い」によるコミュニケーションのほうが、動物全体の進化の過程では新しいに違いない。

デカルト的にいえば「我思うゆえに我（自我）あり」ではなく〈臍皮思うゆえに我（自我）あり〉とも言うべき。

実際、哲学・心理・文学の分野でも、**皮膚の自我性**は古来とも中心テーマも1つであった。例えば、

こころと皮膚

スキンシップの機能、皮膚接触によって分泌されるホルモン等が語られているのですが、個人的に思い入れがあるのがハーロウの実験。「硬い針金でできたミルクが出る母サル模型」と「ミルクは出ないがふかふかのタオルでできた模型」があると、子ザルがタオルのお母さんの方を選んだ、という有名な実験です。

わたしがこの写真を初めて見たのは小学生の時で、カール・セーガンの『コスモス』に掲載されたものでした。大変ショックを受け、今でも写真を見るだけで涙目です。

ミルクが出なくてもタオルのお母さんがいい。そんなの、そんなの、当たり前じゃないか！ ああ・・・。

髪は命綱

本書末尾では「皮膚と進化」が考察され、「ヒトは毛をなくしたことで、スキンシップという新しいコミュニケーションの方法を手に入れた」という視点が提示されているのですが、その中で体毛を失った経緯についてのいくつかの説が紹介されています。

皮膚の細胞は可視光の三原色にそれぞれ異なる応答を示すことがわかったという。つまり、皮膚は色を感じているわけだ。又、脳と皮膚は細胞の生まれが同じという。脳だけが身体の全てをコントロールしているのではなく、脳の機能とされる意識は、脳だけでなく、骨や筋肉や皮膚が、意識を正常に維持するためには必要という。つまり、皮膚は情報処理をする臓器である、第三の脳と言えるものだという。 『皮膚感覚が心を育む』

麻雀をやったことのある方ならご存じの「盲パイ」、ちょっと訓練すれば親指でなぞるだけで、ほとんどの牌が何が彫られているか当てることができる。この本の中で、指の感覚が敏感なのは指紋があるためだという説も紹介している。指はいうまでもないが、皮膚というものは、我々が普通に考えているよりは、はるかデリケートにできているようだ。また、目の錯覚だけでなく、触覚の錯覚もあるという話なども紹介している。

人は身体から毛をなくすことごとによって、スキンシップというコミュニケーションを手に入れるべく進化した。つまり全身を顔にしたのだという話など面白かった。皮膚以外の感覚器官である目や耳、舌などはそれぞれ光、圧力、分子などの刺激を受け、それを電気信号に換えるだけですが、表皮細胞であるケラチノサイトは圧力、温度、湿度、分子、光を感じ取り電気信号以外にも様々な情報伝達物質を作り出しており、ケラチノサイトが集合して表皮という組織を形成した時には、ひとつの情報処理システムとなるばかりか、「自分の状態をモニターし、その状態が壊れても、その壊れ具合を顧慮しながら、元に戻す力」に生命の本質を見る思いがするとして「皮膚は第三の脳」であると宣言しています。

その他にも皮膚に刺激を与えることで治療する針灸治療に関しても著者自身のアトピーなどの治療体験なども交えながらふれたり、皮膚と「こころ」の関連やテレパシーが実在するかどうかといった問題まで言及されており、全体としては誰にでもわかりやすい内容になっています。

皮膚脳

皮膚が免疫系・内分泌系に及ぼす影響

ATP(アデノシン3リン酸)は生体内ではエネルギー通貨ですが、神経系では情報伝達物質でもあります。

「皮膚は色を認識します。しかも、好きな色もあれば苦手な色もある。」

身につけ色によって皮膚を活性させて美肌になるかもしれません。カラーセラピーが有効なのかもしれません。赤に肌着をつけると健康に良いのは皮膚が色を認識してるのかもしれませんが。

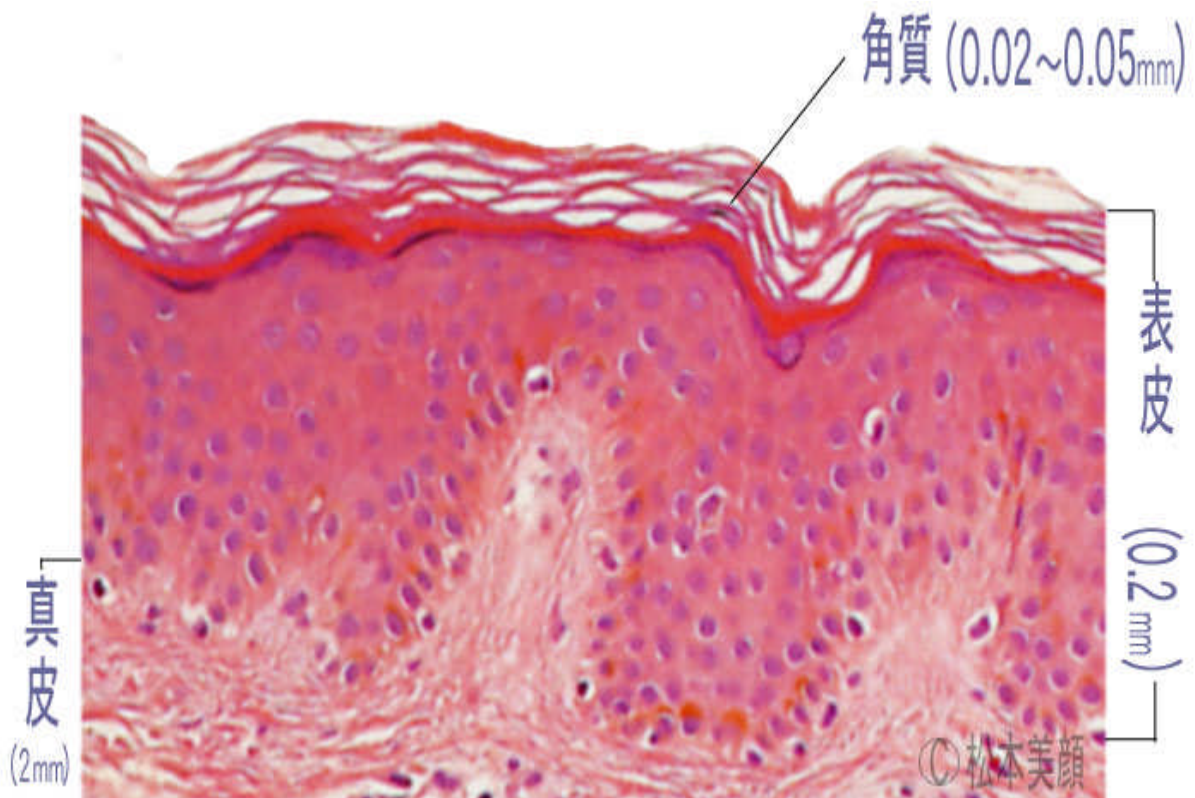
「皮膚は電池でもあるし、電気仕掛けのセンサーでもあります。皮膚の細胞は孤独に電波を発信してるようです。」

マイナスイオン説で説明すると、患部に当てた施術者の手が痛くなるのは、その患部に骨から追い出されるマイナスイオンが上部のところに停滞して、その部分にある痛覚神経細胞にふれるから、患部が痛むのである。それに施術者が手を当てると、そのマイナスイオンが施術者の手に移って、施術者の鋭敏になっている痛覚神経細胞にふれるから、施術者の手がいたくなるのである。施術者の手がウンと痛くなるには、その患部のマイナスイオンがほとんど全部移ってくるからである。したがって患部の痛みはほとんどなくなってしまふ。そして治癒するのである。

著者は手当て療法の治癒の原理を上記のように説明しています。この考え方に興味を持ちました。

大自然の治癒力 手の妙法 吉田 弘 東明社

植物の水蒸気エキスで皮膚中の β -エンドルフィンの量増加により皮膚機能改善
非特許文献1, 2参照)。



皮膚のアセスメント技術

高齢者の皮膚の多くは皮脂腺や汗腺の機能低下により潤いを失い、著しいケースでは皮膚の落屑が認められます。当院に入院された患者様を対象とする事前調査では、1病棟の患者様47名のうち、肉眼的にはっきりと認識できる乾燥肌をもつ高齢患者様の割合は約6割にも達しました。

中でも経管栄養を実施している患者様に乾燥肌が多くみられ、入浴や毎日の清拭、緑茶を使った手浴・足浴のスキンケアでは不十分と感じ、今回、当院入院患者様の中から経管栄養を実施している患者様を対象としたスキンケアの改善に取り組みました。

この研究の目的は、

1. 高齢者の乾燥肌に及ぼすベピーオイルとマッサージの効果を把握する。
2. スキンケアの回数と皮膚の変化を観察し、適切な援助方法を見つけることにあります。

この取り組みにあたり、私たちは、当院と同様の療養型医療施設を対象として高齢のスキンケアの現状把握を目的とした実態調査を行いました。

スライド・・・(アンケート内容)

「老人乾燥肌の定義」は 65 歳以上でカサカサ肌から落屑が見られる状態をいいます。

「項目」として

1. 患者様全体に対する“乾燥肌”のみられる患者様の割合
2. “カサカサ”のみられる部位と順位全身・上半身・上肢・下半身・大腿・下腿
3. 食事摂取形態の違いによる差の有無・順位経口摂取・経管栄養・・・VH
4. 通常のスキンケアの方法
5. 乾燥肌に対する特別なケアの有無・方法・効果についてアンケートを出しました。

スライド・・・(アンケート結果)

この調査で分かったことは、経管栄養の患者様に乾燥肌が多く、具体的な部位としては下肢に多く見られるということです。また、スキンケアの方法では、ベビーオイルによるマッサージが効果的であるとする意見が多くありました。そこで、当院における今回の取り組みにおいても、ベビーオイルの塗布にマッサージを併用した方法を検討してみることにしました。

方法

経管栄養を実施している高齢患者様 6 人を対象として、ベビーオイルとマッサージ効果を調べてみました。特に、カサツキの多い下肢全体に、ベビーオイル約 3cc を用い、肌に馴染ませる様にマッサージするスキンケアを過 2 回、2 週間サイドで試みました。

同様な方法で週 3 回、毎日と 2 週間サイドで実施した結果を比較いたしました。

皮膚の変化を肉眼的に観察する主観的データと皮膚の油分値と水分倍を測定する客観的データの 2 点から判定を行いました。

結果

実施前は皮膚の落屑が著しく、シーツにポロポロ落ちている状態でしたが実施後はほとんど見られなくなり、ベビーオイルによるマッサージは効果的であることがわかります。

マッサージの回数と関係は、塗布し始めた頃から効果が表れ回数とはあまり関係はないようです。

スライド・・・(理想値のグラフ)

つづいて、客観的データとして皮膚の乾燥状態を数値で表せないものかと考えて、某化粧品会社から皮膚の油分、水分を測定できる器械をお借りして測定することにしました。

スライド・・・(患者様の測定値の変化)

これは、患者様 6 名の細分、水分の測定結果です。

スキンケアの回数を増すごとに油分、水分の値が理想的に近づいている事がわかります。

A という患者様の場合、週 3 回のケアでは、油分 4 に、水分 12 まで改善いたしました。

ケアの回数は直接皮膚の状態に影響し、週 2 回から週 3 回のケアでは明らかにその結果に変化が見られ、週 3 回のスキンケアで十分な目的が達成されたと思います。

考察

これまでの結果が示すように、ベビーオイルを用いたスキンケアは効果的であり、主観的、客観的データにしてもそれを裏づける結果となりました。

高齢者の乾燥肌を改善するにはスキンケアではなく、栄養状態もまた大きな影響因子ではありますが、私たち看護者として関われる一つの方法は効果的なスキンケアを確実に実施することにより現状を改善し、又、悪化させないことではないでしょうか。

最後に、高齢者のケアの基本は、患者様の QOL を尊重したケアにあります。

今回のスキンケアなどの基本的援助がとかくルーンワークになりがちな行為を反省し、この調査を通じて効果的なスキンケアの援助方法を見つけた事に、大きな成果を感じました。今後さらに、この成果を生かして、高齢者の潤いのある肌づくりを目指したケアにありたいと思います。

質疑応答

Q 特にベビーオイルを選んだ理由は何か（西伊豆病院：山本）

A アンケートをとった結果ベビーオイルが多かったので選んだ

Q ベビーオイルとはなにか。どういうものか（座長）

A 昔からある。赤ちゃんの肌に良い。皮膚の汚れを落とすと言われている

Q 当院は皮膚科の Dr からの学習でナイロンタオルは皮膚に良くないという理由で晒に変えた。ナイロンを使う理由はなにか（竹川：柴山）

A タオルを使ってみたが汚れが落ちにくかったので、ナイロンに変えた

Q 勉強会で石鹸で泡立てて撫でるようにするだけで汚れは落ちる。油分は取ってはいけないと学んだ。ベビーオイルは保湿剤として使用していると思う。水分の喪失を防ぐので、入浴後、湿度のあるうちに使うと良いと言われるが、オイルはいつ使っているのか（竹川柴山）

A 入浴後も清拭後も関係ないという結果が出たので、1時間以内に使用している。研究は夏に取り組んだので、かさつきの例が少なかったが寒さで今は増えている

エルンスト・マッハによる「皮膚的空間」

ニーチェの敢然たる「皮膚性」への意志の表明、

トーマス・マンの『魔の山』における皮膚論、

ヴァレリーの逆説（「人間においてもっとも深いもの、それは皮膚である」、

ディディエ・アンジュー『皮膚 - 自我』からの引用——《「皮膚 - 自我」は原初的な羊皮紙で、そこには皮膚の上の痕跡からなる前言語的な「原初」の文字の下書きが、パランプセストのように消されたり、こそげ落されたり、重ね書きされたりしながら保存されている。》

（266 頁）——、「ヨブ記」のミュトスと安部公房『砂の女』の引用

（「人間に、もしか魂があるとすれば、おそらく皮膚に宿っているにちがいない」

）、

アントナン・アルトーの皮膚としての「基底材」、等々の絢爛たる「遁走的語り」を経て、皮膚と魂、皮膚と精神性との「のっぴきならぬ関係」と現代における「表層の崩壊」とも

いうべき徴候に解きいたり、本質や深みや内部・内面・背後世界への帰還という「もっともらしい二元論」への安易な逃走を諫める、「皮膚論的な想像力のために」と題された結びの文章はまことに圧巻だ。

。

精神分裂病患者の“重ね着” 老年期の触覚障害

免疫には精神的な限界、どこまでが自分でどこからが他者か、という頭で分かる限界と、実際の身体としての限界（『皮膚と自我』

精神病では、他者と自己の境界が不安定になり、自我が崩壊することもある。さらに、皮膚や肝臓ではなく、心の座である脳を移植したら、自分の「私」の代わりに他人の「私」が入り込んでくるのではないだろうか。

新生児は、そもそもどこまでが自分の身体で、どこから外界が始まるのかということさえ知らない。自分の身体の一部を触ると、「触れる」と「触れられる」が同時に成立する（セルフ・タッチ）。そのような原因と結果の間の偶有性を通して、次第に身体の範囲を確定していくのである。最初からア・プリオリに身体が与えられているのではない

皮膚移植

第一の皮膚 内と外との境界

皮膚は物質代謝系における生物個体の内と外との境界である。トポロジカル（位相数学的）に記述すれば人間は管構造をしている。東北の海岸には‘ホヤ’とよび、《海鞘》と漢字で書かれ“海のパイナップル”とも呼ばれ酒飲みには堪えられない不思議な袋状の海産動物がいる。この海鞘が脊椎動物の祖先形であり、一端は岩にへばりつき他端には二つの孔があり一方の孔は体内に海水を取り込み他方の孔は体内から吐き出す。それが管構造の原形であるし、またまさに袋としての生命体そのものである。

バックミンスターフラーは立花隆との対談で宇宙においては左右とか前後とか上下とかでなしに‘内と外’の概念が重要になると指摘した。地球重力圏の内と外。宇宙船の内と外。

定常開放系という考え方ががある。生物体は環境とたえず物質交換をする中で構造と定常性を維持し、成長させていくシステムであると考え。そこでは皮膚は内と外との境界

線が明確な袋のイメージでであるよりも多孔体とか網様体といった網のようなイメージになる。

一方、情報系における内と外の関係はどうなるだろう。環境から情報をとりこんで生体の内部である処理を行い表現としての言語行為なり身体動作を行う。といった物質代謝系と似たような袋の図式が考えられる。それが一般的なイメージだろう、しかしむしろ仏教思想でいう唯識論（総ての物事はそれ自体が存在するのではなく、それを認識する人の心の働きによるものだとする考え方）が人間の情報構造について考察するにはふさわしい。そこには内と外は存在しない。三界は唯心であり、存在はすべて心の中にある。養老孟司は“唯脳論”のなかでヒトの活動を、脳と呼ばれる器官の法則性という観点から、全般的に眺めようとする立場を、唯脳論と呼ぼう。」と定義している。しかし唯識の立場はもっと徹底している。総ては脳内の出来事であり、現象総体は心の中の中のみある。実体と認識される物理的な存在はすべて虚妄にすぎない。唯識の僧侶と禅僧との対話にこのようなものがある。

「ところであそこに見える庭石はあなたの中にありますか？」と禅僧が尋ねる。

「当然、私の心の中にあります。」と唯識の僧。

「さぞかし重いことで！」と禅僧が揶揄する。このように唯識の考えでは庭石ばかりでない、宇宙全体を背負っているのである。内と外の境界がないところは定常開放系に近い、むしろ情報と身体との関係における定常開放系的思考は唯識論的思考によって正しく認識できるといえる。人間が情報を記憶し保持することは、トポロジーでいえばメビウスの環の四次元への拡張であるクラインの壺の内部に水が溜まる様なものである。するとメビウスの環に裏と表がないように内と外の境界もなくなる。情報の保持機構としての神経細胞のネットワークが網構造として浮かび上がる。

皮膚の持つ触覚感覚は視聴覚などの他の諸感覚器官の原型をなす。その意味で人間の受容する総ての情報に皮膚はかかわる。

個別の人間の皮膚という形態論からでなしに、集団としての人間について考えて見よう。『家族』はほとんど無意識に語られる人間の身体そのものである。家族を考えると個人はその自我意識ほど自立した身体感覚をもっていない。家族の身体は『家庭』として意識され『家』として存続される。核家族化によって家意識は希薄化したように見えるがむしろ、「内と外」意識は非常に強い。『家』に象徴される大家族制には曖昧な周辺があり、境界はぼける。

その次の群れの単位である村落共同体については、たとえば『祭』は地域共同体の一時的な身体形態の表現といえる。それが意識され可視化される瞬間である。無論村落は明確な境界をもつがメンバーのコミュニティー意識はまちまちである。

会社や大学などの『法人』が一つの形態をもつ。CI(コーポレイテッド・アイデンティティー)などで努力をしているがその身体表現は多くの困難がともなう。コンピュータネットワークの生成はこの組織が母体になっている事は事実であるし、興味深い。日本の会社社会ではそれへの忠誠心は高く身体意識はかなり高い。『法人』そのものは法律的な擬制であるといえる。

都市が一つの共同体の形態あらわすならばその都市の発展と衰退のあり様を可視化することはできる。数百年～数千年単位の時間の中で。このように群れの身体を可視化しようとするならば長い時間を縮小し大きな空間を一望するエキスパンデッド・アイをもつことが要請される。

国家有機体説がある。この考えはナチズムとして第二次世界大戦後は否定されてきたが、国家はまだ強固な人間の思考を決定づける大きな要素である。そして国家の境界は明確である。集団としての人間を考えると現在一番支配的な単位が国家であるといえる。人類有機体説という考え方がある。しかし類的な存在として人間をとらえるとそのときの物質的な内と外との境界はどのようになるだろうか。その形態を明確に認識するのは難しい。人類という種だけで閉じてはだめだ。

むしろジェームズ・ラブロックらの提唱する地球全体を一つの生命体として捉えるG A I A仮説が新しい意味をもってくる。地球のとそれを取り巻く薄い球体の気圏と水圏が生命のフィールドであるし『ガイア』の全形態であるとも身体であるともいえる。

第二の皮膚 衣服の発生

人類の発達史における衣服の起源を位置づけると次のようになるだろうか。

言語の獲得



直立歩行（森林からサバンナへ）



道具の制作（石器の使用）

火の獲得



農耕の発明

土器の制作

衣服の着用



文字の使用

いわゆる裸族と呼ばれているイリアンジャヤ（ニューギニア島）のダニ族でもキオというペニスケースをつけ、腰には紐をまきつけ、幅広ネクタイのような子安貝のワリモケンをつけている。

リーフェンシュタールがアフリカのスーダンで取材した写真集‘ヌバ’やヴェラ・レーンドルフの‘ヴェルーシェカ（変容）’に見るように身体変形と身体装飾、化粧と着衣行為の間には非常に強い相互補間関係がある。

衣服の発達は基本的には“裸か着衣か”の対立を軸としてきた。どこを被いどこを見せるか。恥ずかしいから着るのではなしに着るから恥ずかしい。羞恥心は被い隠すことによって初めて発生する。防寒や怪我にたいする防御といった機能面へよりも、衣服の発生に関する一つの重要な指摘はその象徴機能に注目する。衣服を着る理由はなかなかはっきりしない。たとえば栗本慎一郎の”パンツをはいた猿”には人間がパンツを脱がない理由について流流述べられていてもパンツをはいた原因と理由については一切述べられてない。

衣服はシンボルである。異性に強く呼びかけ、異性の気を引きつけ、同性に対しては地位や富をアピールする。また着る人の思想や内面感情を無言のうちに的確に表現する。衣服は言語である。衣服は共同体への帰属の表明である。また仲間への連帯のアピールである。

ナイロンやポリエステル等の合成繊維の発達によってパンスト、ボディースーツ、レオタード、スパッツなど身体に密着する衣服がファッションの状況を変えている。第二の皮膚の完成といえる。その皮膚をまとうことによってスカートや下着などの他の衣服のアイテムはラフになり自由になる。

衣服と移動体（ヴィグル）と建築の間には様々な関係がありその中間種が存在する。フトン、コタツ、カヤ、テント、パオ、モービルハウス・・・移動体（ヴィグル）とそのなかにいるヒトはホモ・サピエンスから新しい種（ホモ・モビタス）の誕生と位置づける考え方もある。それに従えばネットワークのなかのホモ・サピエンスをホモ・ネットスとも名づけようか。

人間と自然環境の間には衣服と同様に様々なメディアを介在させる。また介在させないと気がすまない。人間はそういう動物らしい。裸そのままですら自然と対置できない。人は第二の皮膚である衣服をまといとりあえず安心する。それは人間が社会的動物であるからだ。

第三の皮膚 電子化された皮膚

アメリカのポップアートの作家である、オルデンバーグは60年代に「ソフトタイプライター」「ソフトイレット」などの作品を発表した。それは近未来における機械システムと人間との関係を先取りする芸術家の予感だろうか。

メディアスーツと仮想現実の関係について考えて見よう。

90年代電子機器は物理的にソフト化しますます環境化してきている。また潜在化して表面に出てこなくなってきた。強誘電性液晶の技術は人工環境全体を表示系に変える起爆力をもっている。人々は反応し変化する環境のなかに身を置きたがっている。絶えず変化する電子壁紙や電子ガラスが日常生活空間の中に取り入れられる日は近い。ビルや建物の外壁が表示系として利用されることも大いに考えられる。

ジェット機のヘッドアップディスプレイの技術は自動車のリアウィンドウに応用されナビゲーションシステムの表示系や計器類の表示系として大きく変わろうとしている。近づいてくるバニシングポイントや現実風景にたいして山の名前や標高が表示され、通過する集落や町の名前、人口数や概要が解説される。ビルの名前や交差する道路名、行き先が表示される。重要なことは現実の風景にオーバーラップしてリファレンス情報が表示され提示されることである。シースルータイプの表示装置の必要性がそこにある。とかくヴァーチャルリアリティーというと閉じた HMD だけの世界を思いがちなのだが。

それと同じ事が人間のヘッドマウンテッドディスプレイ (HMD) にも起ころうとしている。液晶技術の発展によって、ヴィジュアルウオークマンともいべきゴーグルが造られ現実の風景とコンピュータやネットワークから情報が同時に見えるようになるシースルータイプの HMD。さまざまなセンサーを装着して外界をヘッドマウンテッドディスプレイを通じて可視化させる。たとえば頭部に赤外線センサーを装着して外界表面の温度状況が絶えずわかるようにする。眼球運動センサーによって注視点入力がマウスのかわりになる。

このゴーグルは電話やコンコンピュータ・ネットワークと接続されることにより、また電子回路の小型化とソフト化によってメディアスーツとなる。服のように肉体に纏わりつき、時計のように持たないとどこか落ち着かない心理作用を持つようになる。社会的環境の中

でヒトが裸のままに対置できないようにメディアスーツを着用しないといられなくなる。携帯電話やシステム手帳が一度使いだしたらもう手離すことことができなくなるのと同じように。そのようにして第三の皮膚は人間の社会生活に密着する。そして仮想現実
は仮想ではなくなり単なる現実になる。今の我々が感覚諸器官をとうして得る世界を現実として何も疑わないように。

マックルハーンが『メディア論』のなかで強調したのは人間の諸器官の拡張原理としての諸メディアの発展の方向と人間の諸感覚の変容とそれにもなう思考プロセスの変化である。《メディアはメッセージである》はそのことをさすのだ。メディアを選択したときすでにその内容（メッセージ）の90%はきまっている。パソコンネットワークやインターネットによってコンピュータが個別の存在ではなしにネットワーク化して存在するときコンピュータメディアは人間拡張のツールであるよりもむしろ人間結合の原理としてマックルハーンの提唱するグローバルヴィレッジが現実のものとなる。さらに地球全体が一つの生命有機体とするガイア仮説と結び付けてピター・ラッセルの提唱するグローバルブーレンのハードウェアの誕生と捉えるべきである。環境全体が表示空間になることと同時にその表示装置に各自のコンピュータのウインドウをひらいたり、アクセスできるようになる。ガイアの神経系と大脳空間が物理的実体として形成されることになる。

類的な存在としての人間の思考の大部分が集合的無意識と呼ばれる領域であるように、西
欧近代のデカルト的自我意識が幻想であることに気づくだろう。そもそも言語も知識も、
思考も個人のものではなしに集団的なものだ。それは当然、身体的な存在そのものについて
も言える。

『孔子暗黒伝』が代表作の漫画家、諸星大三郎の描く『イオの世界』は機械と人間の融合
し、一体化した世界をしめしているが1960年代に生活装置グループ《イオ》のしめしたも
のは共同思考装置であり共同思考法人である。

『われわれは情報や社会的・情動的なコミュニケーションを、仲間や友人や同じ関心を持
った「見知らぬ人」と大量に交換する「ネットワーク国家」となるだう。・・・われわれは
「地球村」になるのだ。・・・一人の個人が文字どおり国のどこでも、あるいは世界のどこ
でも働き、買物をし、教育を受けたり、いっしょに勉強したりすることができるよ
うになるのだ。』

そのような共同体を実現し得る、様々なメディアが作られ用意されつつある。無論国家の
壁は高くて強固である。言語の障壁も非常におおきい。しかし意外ともろくベルリンの壁
が壊され、ソビエト連邦が崩壊したように、そして今多くの国家が乱造されているように

コンピュータネットワークが人間同士の諸関係を大きく変革する原動力になり、国家権力の壁を突き崩しうるかもしれない。それは余にも楽観主義的ではあるが、敢えてその行き着く先をいえば惑星ソラリスで展開する次のような光景だろうか。

『擬態活動を眺めていると、忘れ得ない印象が次から次へと湧いてくる。超自然で異様なものが作られはじめるときには、海は<創造意欲の高揚>を味わっているように見える。そのような時には、海は周囲のさまざまなヴァリエーションを創り出したり、それらを組み合わせて複雑な形を創り出したり、あるいは<形式の抽象>をやったりして、何時間でもぶっつけにその仕事を楽しんでいる。「ソラリスの海は生きていて、しかも理性的な存在である」』…… “ソラリスの陽のもとに” スタニスワフ・レム／飯田規和訳

個人も人類も、さまざまなべつの生命個体も全部溶解して海のようになった知性体の姿がある。太陽系第三惑星テラをつつむスープ状の知性生命体『ガイア』。

それはある意味では、唯識論の全面的な復権だろうか、それともイディアの形而上学の復活であろうか。

形而上なるものこれを道といい、形而下なるものこれを器という。[易経、繫辞上傳]

[戻る]

[前に戻る/back]

意見、感想がある方はメールを。

皮膚に耳を傾ける

皮膚は神経系と密接につながっているので、情緒にとっても敏感であ

る。だから心の意識的な部分によりも、奥底にある欲求や願望、恐怖に触れることができるのである。あなたは明日の会議のことをあまり気にしていないつもりかもしれないが、皮膚に表れた蕁麻疹やニキビが緊張を表している。

しつこい皮膚症状は、しばしば内側からのメッセージである。それは助けを求めているのだ。このメッセージを判読するのは、ただ人の言葉に耳を傾けると言うよりは、いかにして人間の身体言語を解釈するかを学ぶようなものである。あなたの皮膚は、何を言おうとしているのだろうか？

生体は何よりも生きていくために、複雑な心と体によって作られており、皮膚もその一部なのである。そして全ての生体にとって、生きているということは、基本的な欲求を満たすことを意味している。あなたは皮膚の症状に煩わされ、苦しい思いをするかもしれない。しかしそれによって成長に必要なものを、生物的・情緒的に手に入れようとしているのである。

情緒的欲求が生物的欲求のすぐ次に位置しているのは不可解に聞こえる（つまり愛情を水や食料と対比すれば）が、それはほとんど交渉の余地がないし、どこで一方が終わって一方が始まるのかを指摘するのは困難である。有名な研究でフランスの精神分析学者ル

ネ・スピッツは、ある孤児院で乳児を観察した。見たところ、彼らの生物的欲求は全て満たされていた。食事を与えられ、衣服を着せられて、暖かくしていた。しかし彼らは愛情を全く受け取っていなかったのだ。幸運にも愛情深い家族のもとに生まれた乳児のように、抱き上げられたり愛撫されたりすることがほとんどなかった。スピッツが観察した赤ん坊の多くが、正常に成長することができなかった。生きていくために必要な愛情という栄養分なしでは、身体が萎縮したり、死んでしまう例もあった。他の研究でも、健康な発育には愛情と抱擁が必要なことを立証している。その一つに、施設に収容された赤ん坊は他の赤ん坊よりずっと湿疹になりやすいのである。

私たちの欲求は、全面的に依存する生後一年間が最も劇的に見えるけれども、生涯にわたって持続するのだ。ちょうど食物、水、および暖かさへの欲求から決して卒業しないように、私たちは三種類の情緒的な滋養である愛情、尊重、保護を常に必要としている。

愛情は情緒的には食物にも相当しており、生命を支えている世界からの、人を育む贈り物である。私たちは尊重も必要としている。愛情や食物、そして休養は私たちが求めて与えられるもので、気まぐれに、あるいは一律に与えられるものではない。私たち大人は家族や友人達から尊重されて、初めて自分が人々から認められた独立し

た人間であることを確信するのである。

私達が成長して行くためには、極端な熱さや寒さから保護される必要があるのと同様に、情緒的な激しい行き過ぎからも保護されることを必要としている。私たちはそのうち快適に暖かく、または涼しく過ごすことを学ぶのと同様に、情緒的な重荷からも自らを保護することを学ぶのだ。

不完全な世の中であって、私たちの内面で欲しいものと、外界から得るものの葛藤はしばしばある。その境界—皮膚—において、この葛藤が実演されるのだ。満たされなかった欲求は、精神エネルギー保存の法則に従う。生後6ヶ月で愛情たっぷりに育てられることを望み、40歳で大人として認められたいと望んだとして、そしてもしそれが満たされなければその欲求はそう簡単には消えないのである。私たちはあれやこれやと、欲しいものを得るために何度も試みる。それでも手に入れられなければ、最後はなりふりかまわずに身体的な症状で訴えるのである。

例えば赤ん坊が愛情に飢えていれば、もっと泣くだろう。もしそれが役に立たなければ、かんしゃくを起こして無気力になり、最終的には乳児湿疹を出すだろう。情緒的な圧迫と欲求不満の痛みは、弱い所が壊れるまで、赤ん坊の幼い身体を引っ張る。湿疹によって、身体全体が皮膚を通じて泣くのである。

健康だった人々が晩年になって皮膚が荒れる場合があるが、その場合でさえも、強い欲求が満たされなかった過去に心理的な起源があるのかもしれない。実のところ、そのような病気の起源は出生前までさかのぼることもあるのだ。アレルギーや湿疹を持って生まれた乳児は、遺伝性のリスクを負っているか、または出生前に異常なストレスにさらされていた可能性がある。

荒れた皮膚は聡明な使用人よりは忠実な家臣に似ており、命じられたことを遂行するまでは、辞めようとししないのだ。その一連の作用が働いてしまうと、ほんの少しでさえも止めるのは至難の業である。たとえば私の患者のひとは、子ども時代に心のこもった養育を切望しているのに、与えられないまま大人になった。彼女の全存在が切望した心安まる配慮を手に入れるために、皮膚がむけて炎症を起こして、それは高い代償となってしまった。もはや正常な生活は不可能であった。

あなたが皮膚の言い分を聴くまで、そのメッセージ—奥底にある欲求の声—を、皮膚は何度もくり返すだろう。医薬品や禁欲的な無関心によって黙らせようとすれば、もっとうるさく泣きわめくだけだろう。選択肢は、内なる自分に皮膚が求めているものを与えるか、あるいはそれが不可能なら欲求不満の痛みを正面から向き合っ

その解決にすぐに取り組むことである。とても難しいことかもしれないが、あなたはその第一歩を今すぐに踏み出せるのである。

それは皮膚の荒れに対する見方を変えることだ。ずっとくっついてきた医学的なレッテルをはがして—「帯状疱疹」であれ「蕁麻疹」であれ、何であれ忘れてしまっ—あなたの病気をより深い欲求の症状としてとらえるのだ。症状の見た目や触れた感じ、痛みを身体的な性質のままにしていると、情緒的な要因を分かり難くしてしまうので、気をつけるべきだろう。この水準で考えると、あなたの帯状疱疹は同病者のケースとよりも、近所の人々の蕁麻疹との方に共通点が多くあるかもしれない。

あなたの皮膚の下にある問題を扱う第一歩は、心理学的な用語にラベルを貼り直すことである。私は荒れている皮膚があなたに何をしようとしているのか、聞いてみるのが最も有益だと思う。根本的な欲求である愛情、尊重、保護を満足させようとしているのだろうか？ 皮膚を情緒的な重荷から開放するにあたって、あなたは皮膚が骨を折っている任務を確認し、理解しなくてはならない。以下の11の任務は、最も一般的なものである。

1. 皮膚は愛情と保護を求めて叫んでいる

基本的な情緒的欲求を満たすことは大変重要であり、私たちはそれを成し遂げるために生物学的メカニズムで作られていると言ってもよいくらいである。私たちが赤ん坊に微笑んで抱擁したくなる、生まれつきの何かがあるのだ。ほとんどの両親が子どもを養い守るために最善を尽くすのであるが、人間は不完全な存在であるし、この世の生活は難しいものである。

子どもに愛情を与える能力のない母親も、見方を変えれば下手なしつけの犠牲者であるかもしれない。生活の中での大きな変化（おそらくは家族の死や、家族から見捨てられること）によって、人は赤ん坊に適度な愛情と保護を与えることができなくなる。貧しくて食べていくのも大変で、適切な保育ができなくなってしまうことも少なくない。

このような早期の欲求が満たされないと、心の中に空虚感が残る。その空虚感には食欲で、実際に、情緒のブラックホールと言っても良いほどである。全ての愛情、尊重および保護を吸収し、飽くことなくそれを求め続けるのだ。

私たちは、自己授乳や自己保育と言う見当違いの試みで、この空虚感を満たそうとし続ける。意気消沈している時には、新しい服を自分に買ってあげる。コマーシャルが愛をもたらすと言っている、「申し分のない」車やシャンプーを買うのである。アルコール依存症者と薬物嗜癖者は、運命的で破壊的な自己授乳の企てで、ぬかるみにはまっている。彼らは愛情、保護、および尊重の、化学的な幻覚を必要としている。なぜなら本物をずっと前に剥奪されてしまい、いまだに苦しんでいるからである。

《ジョアン》

ジョアンの父親が家族を捨てて出て行ったとき、彼女はまだ赤ん坊だった。母親は気持がくじけてしまい、満足な愛情と養育をほとんど与えることができなかった。何も言えない赤ん坊のジョアンは、その欲求を皮膚症状に表した。ひどい乳児湿疹が、ジョアンの代わりに苦痛と淋しさを叫んでいたのがある。

ジョアンは大人になり結婚し母親になったが、彼女の皮膚は幼い頃に受けられなかった愛情と配慮を求めて叫び続け、ずっと彼女を悩ませていた。皮膚は時々、入院が必要になるくらいにかん高く泣いた。ジョアンにとって入院は、子ども時代に戻ることを意味していた。日常生活の要求と責任から免除され、看護婦達が母親のように彼女を入浴させて傷ついた皮膚を慰めてくれた。まれに家で治療を受けることで、ジョアンはステロイド・クリームと特殊な入浴剤を使って皮膚を自己保育できるようになった。

意味深いことに、彼女の湿疹は例えば夫の短い出張など一時的に見捨てられた気持ちになるような時に——それは人生で最初の男性に見捨てられたという痛烈な損失の再演を意味する——急に症状がひどくなった。

ジョアンは私と共に取組み続けて、短期間ではあるがかなり劇的な改善を見

ることができるようになった。しかし彼女の治療は中断した。私は休暇を取って出かけた—彼女にとってそれは、父親に見捨てられた時の再演になった—そして彼女は逃げ出してしまった。

2. 皮膚は激怒している

怒りは根本的な情緒的欲求が満たされない時に、私たちがしばしば感じる反応である。私はカップルのけんかで、仲たがいの背景になっている怒りの85パーセントは次のことを意味しているのを見いだした。それは「あなたは私を愛していない」、「私を守って」、または「私を人として尊重して欲しい」ということである。

怒りは正常で健康な反応であるが、私たちの多くはそれを否認するように教えられている。怒りは良くない。だからもし私たちが怒りを表に出したり、もしくは感じるだけでも、それは良くないことなのだ。親は子どもへの切り札を何枚も持っていて、当たり前のように使う。「怒っているんだったら、お前のことなんか知らないよ」と言うわけである。

このような親から子どもへのごちゃまぜのメッセージが混乱を招くのだが、それはまれなことではない。極端な例では、親が怒りを否認するように脅しながら子どもを叩いて、子どもをもっと怒らせるようにする。子どもはまた、親の怒りの発作で大いにうんざりさせられるので、自分自身にそのような感情があっても、少しも自分のものとは認めなくなるだろう。

私たちは怒りを感じたり、それをできるだけ直接表現するかわりに（彼の鼻を殴らなくとも、不公平な上司に激怒していれば気がつかれる）しばしば抑圧するか、またはそれを内側に向ける。自殺および断片的な自殺—アルコール症や事故を起こしやすい傾向、生きがいになる楽しみを放棄するなどのような自己破壊的な行動—は、怒りの方向を自分に向けたものである。怒りは抑うつの一般的な構成要素である。

「受動- 攻撃的」な人とは、自分は怒りを全然感じないで他人の怒りをかき立てる、洗練された能力を発達させているものだ。そのような人は、怒りを発散したい気持ちをかんかんに怒らせるような挑発的な行動によって満足させる。この空振りはどんなかんしゃくよりも効果的であるばかりではなく、相手は彼のせいだ怒りを感じていると思ってしまう。

感じられることも表現されることもなかった怒りこそが、荒れた皮膚の下にあるもっとも一般的な心理的メカニズムである。他人に怒りを感じるのは危険であったり許されなかったりするのだから、皮膚がむち打たれるように選ばれる—さもなければ、怒りは自分自身に向けられるのだ。

代わりに皮膚は、大人の中の子どもが表すのを禁じられた怒りの声になるのである。赤く怒った皮診は、持ち主ができないことを世間に示している。「私がどんなに酷い目にあわされたか、見てごらん」と言っているのだ。それは

無関心な親への復讐においての視覚に訴える猛攻撃や、地下活動の企てを表しているのかもしれない——見せかけの穏やかさの下にある真実を、世に知らしめる方法なのである。

《ジョージ》

22歳のジョージは、私のオフィスにイライラして用心深い様子で入って来た。右手は数ヶ月の間、皮膚科学の最善の努力に抵抗した、痛く赤いイボの層でおおわれていた。それらは不可解に出現し、無情に悪化し、居すわるものと決められているようであった。

ジョージの人生の始まりは、物には不自由しないが暖かみを欠いていた。彼の両親は責任を持ち、義務も果たしたけれども、二人とも働かなくてはならなかった。彼と四人の兄弟の世話は、有能けれども内気な祖母に任せられた。ジョージは冷淡なしつけを恨んではいなかった。実のところ、彼は何についても恨みを全く感じていなかった。

去年は近くに住む仲間が軍隊に入ったり、よその土地で職についたり、結婚したりして次々に離れていったが、それもすんなりとは認めなかった。彼は仕事を楽しんでしたが、半年前に工場の別の部署に一方的に移された。彼はその処遇に怒っていただろうか？ 全くそうではなかった——しかしイボはその時に出現したのだ。

治療を始めると、ジョージは子ども時代にはありふれている恐れから一度たりとも脱していないことがはっきりした。その恐れとは「怒りをぶつけてしまったら、やっつけられるだろう」と言うものである。喪失体験は、それに値するだけの怒りを引き出すことができなかった。その代わりに怒りは、ジョージ自身は苦しむだろうが他の誰をも傷つけない内側に向けられたのである。

ジョージのイボが消滅し、怒りを表現できないのを克服するにつれて、ボクシングへの生き生きした興味を発展させたのは意味深いことであった。彼の手が合法的に殴りかかることができた時には、皮膚はもう激怒を表現する任務を持っていなかった。

3. 皮膚はコントロールしようとしている

子どもはたとえ愛情をふんだんに受け取っていても、他の欠かせない欲求の一つである尊重を満たされずに苦しむことがある。私たちは人生の初めから、単なる両親の延長物ではなくて、独立した存在として認められなければならない。私たち自身が個人であることは尊重されなければならない、私たちを世界から分ける境界は認められなければならない。

両親が自分たちのスケジュールに応じて愛情や配慮を与える時、彼らはこの尊重を差し控えているのだ。典型的な例は、自分が寒い時にセーターを子ど

もに押しつけて、自分の喉が渴いている時にミルクの入ったコップを子どもに手わたす母親である。「お父さんが一番よくわかっている」と言って全ての詳細を取り決め、指示する父親も同じことをしている。子どもの自律性を尊重するのを、拒否しているのだ。

いつも両親からごり押しされる子どもは、しばしば反撃する。不屈の独立心を持った子どもは頑として譲らないし、他の誰かが「はい」と言う時にはいつでも、自動的に「いいえ」と言う。彼女は自分流にやっていくし、日常生活で莫大なエネルギーを一連の争いに向けて費やすのだ。彼女の一級品の頑固さは命がけであり、生死にかかわる苦闘をほのめかしている。彼女は魂が無傷でいられるように、自分の境界を確保しようと戦っているのだ。

子どもとして尊重されなかった人々は、世界をひっくり返すために晩年を費やすことがある。コントロールされることへの恐れから、他人をコントロールする情熱ができあがるのだろう。中には両親のような脅迫者になってしまう人もいる。

他の人々は、自分がしたいことを間接的に他人にさせる方法を見つけて、磨きをかけていく。それはよく「操作的」とラベルを貼られる。主体的な人間として無傷であろうとする潜在的な苦闘を無視しているので、この軽蔑的な用語は不適切である。操作的な人々は犠牲を強いる人々と同じくらい、悲惨な犠牲者なのだ。

周りの世界をコントロールする努力において、彼らは議論を好んで言葉の格闘技を用いたり、軽薄さや威嚇、罪悪感のようなもので間接的に無理強いするかもしれない。慢性のあるいはしつこい皮膚の荒れは、容易にこの兵器庫の一部になり得るのだ。

《ピーター》

37歳の研究者、ピーターはほとんど全てにアレルギーであった。確かに彼の友人や家族で、それを無視できる人は誰もいなかった。子どもたちが犬を欲しがったとしたら？ ピーターは犬にアレルギーがあった。田舎へのドライブは？ 彼は花粉と草にアレルギーがあった。妻は結婚記念日にフランス料理のレストランに行きたかったが、残念なことに彼は調理の匂いで発疹が広がるのだ。

それにはいらいらするが、誰も本当に怒るはずがない。どう言ってみたところで、それはピーターの落ち度ではなかった。彼は、できる限りの賛成をした。「僕もそうしたいけど、アレルギーがあるから」というのが、他の人々の計画へのおきまりの答えだった。

私は面接で、ピーターの母もまたアレルギーを持っていたことを知った。彼女は息子を愛する、もろさを抱えた女性であった。しかし彼の自立にはほとんど向き合えないのに気づいて、きつく手綱を引き続けていた。「コントロー

ルするか、コントロールされるか」は、自分の幼児期からピーターが教わったレッスンであった。

母親が彼の子ども時代を支配したように、ピーターは無意識のうちにアレルギーで大人の世界をコントロールしようとした。いつまでたっても、むなし勝利であった。ピーターは他の誰よりも、自分のアレルギーによって完全にコントロールされていた。

治療を通じて、ピーターの皮膚のアレルギーは完全に消えた。彼はむしろ言葉でコントロールし続けているが、ユーモアのセンスは生活を容易なものにしている。

4. 皮膚は性行為を取り締まる警察官である

乳児にとって基本的な欲求の満足は即時的であり、原始的な衝動である——「すぐに欲しい!」。私たちは大きくなるにつれて、手を伸ばしたりひたたくったりするよりも、きちんと要求して満足を先延ばしにすることを学ぶ。衝動を調整したり延期する能力は、ヒトを二等動物と区別する一つの特徴である。

しかしながら、レッスンをよく学び過ぎる可能性もある。今すぐの満足をつかむことを抑制する、内なる警察官（フロイトが「超自我」と呼んだもの）は、正当な欲求と欲望の満足を完全に禁じるほど強くもなるのだ。

両親が示すお手本や態度によって、欲求を持つこと自体（特に身体的な欲求）が悪いと教えられることもある。欲求は立ち去らない。しつけがどんなに抑圧的であっても、愛情、尊重、および保護を求めて、私たちの内なる何かが、闇雲に苦闘するのだ。その結果として内的な欲求と外的な現実、そして「警察官」の道德心の間には行き詰まった葛藤が生じやすい。よくあるパターンでは、判断に迷ったり不安になったりして、欲しいものを得たくても身動きができなくなってしまう。

葛藤はまた、体を舞台にして最後まで演じられるかもしれない。そこでは皮膚が、「犯罪者」である心に対して警察官を演じている。しばしば皮膚が取り締まるのは、性的な願望である。心が「今すぐにしたい」と言えば、皮膚は「求めるのは悪いことだ。お前は欲深くて、セックスに夢中になっている」と言うのである。性的に成熟したことは、自分自身への感情や自律性、他者との関係性とごちゃ混ぜにされるので、まず第一に葛藤の標的になるのだ。

皮膚は、そのような葛藤を解決するのによく適している。人目につくような皮膚の荒れは、「セックスから抜け出せる」と標識が出ている効果的な抜け道なのである。ブツが吹き出したり荒れてしまった皮膚は、デートや性的な関係が引き起こす、脅威と不安に対する保護的なバリアになり得るのだ。

《デレク》

明るく、きびきびした若い弁護士のデレクは、何事に対しても全面的に気持ちを入れ込むことへの深い恐怖があった。それは、愛情が剥奪された子ども時代の遺産だった。彼は冷静で、クールな姿勢を取り続けていた。一緒に暮らしていた恋人との関係は、最大限に見積もっても「わずかに関与している」程度であった。彼を私のオフィスに連れて来たのは、陰部ヘルペスのしつこい再発であった。

明瞭なパターンを発見するのに、探偵の仕事は手間取らなかった。彼か恋人のどちらかが町を離れていた時には、病気はいつも悪くなっていた。彼はすぐにつかの間のセックスの相手を捜す誘惑に抵抗するのを、ウイルスに無意識に頼んできたことを把握した。彼が自分でこれらの性的な決定をする用意ができてしまったら、再発はほぼ完全に終わった。

5. 皮膚は歴史を書き直そうとしている

しつこい、あるいは新しい皮膚の荒れは、時として数十年前の戦いに敗れた余韻である。それは全力を尽くしても子どもが必要とする愛情、保護、そして尊重を与えることができなかった両親と過ごした子ども時代の、永遠の遺産なのである。

発育の主要な章が結果的に悪しきものである時には、同じ物語をハッピーエンドで再演しようとして、歴史を書き直そうとする強烈な本能的欲求が生じ

る。それは例えば、冷たくよそよそしい両親が、愛情豊かに子どもの心の成長を支えられなかった場合かもしれない。不合理に聞こえるだろうが、何とそれは必要なものを得るために絶え間なく奮闘する、不屈の生命力を反映しているのだ。それは太陽を求めて舗装の下から草の葉が顔を出すのと、同じ力である。

《オスカー》

コンピュータ・プログラマーのオスカーが、20代後半に止むことのない一連の蕁麻疹の噴出に囚われていたのは、誰の目からも明らかな経過であった。オスカーの母親は、彼が幼い子どもの時には暖かく十分に愛した。しかし6歳の小さな男の子から、自分の手を離れた小さな男になっていった時に、あっさり愛情を引き上げてしまったのだ。理由が何であれ、彼女はよちよち歩きの幼児にしていたと同じようには、成長した子どもに愛情深くはなれなかった。オスカーに最初の発疹があったのが、その時であった。

大人になってから、オスカーは反復性のパターンにはまった。彼はいつでも、つきあって始めのうちは優しく支持的であるが、彼が自信をもって自律的に行動を始めると、急に冷めてしまうガールフレンドを選んだ。それからすぐに、別の蕁麻疹の発作が起きたものだった。それはまるでオスカーが物語を再演できるように、彼の最初の失敗の舞台をもう一度セットしなくてはいけないかのようなようだった。今度こそは愛情も冷めず、欲求不満もなく、と。もちろんお決まりの不幸な結末は、オスカーの選択によって確実にされた。それ

が彼の母親と似ており、かつて母親がしたようにふるまった若い女性たちである。

オスカーの皮膚は、私との短期の治療の後にかなり落ち着いた。別のセラピストとの長期的な治療で、彼は人間関係の難題を解決する進歩を続けている。

6. 皮膚は愛を求めて苦しんでいる

あなたがすいすいと泳いでいる時には、誰もあなたを救助しないだろう。もし子どもが自分が苦しんでいる時にだけ愛情と保護、支援を与えられると学んだら、痛みは必要なものを手に入れるための切符であると無意識に結論づけるだろう。このような流れのもっと暗いケースが、情緒的に、または身体的に虐待された子どもの心の中で起こる。彼女は自分を愛している人が自分を傷つける人であることを学び、愛情と痛みは避けようもなく結びつくものと予想するようになる。

愛情と痛みを一対にしてしまうと、晩年に際限のない困難を起こす。負け犬が板についたり、事故に遭いやすかったり、成功を恐れる人々は、その犠牲者の中にいる。痛みと虐待のさなかに愛情が見出されるような人生早期のレッスンは、潜在的なマゾヒズムの物語である。

慢性的な皮膚の荒れは、誰かに支えてもらう資格を得るために、十分な苦し

みを犠牲者に起こすのだ。愛情と傷つきがペアにされた時には、皮膚は徹底的に人を打ちのめすことができる。

《ローナ》

ローナは皮膚科医にとって、正真正銘の謎だった。彼女の胸、腹、および足の深い傷は、これまで診てきたどの病気にも全く似ていなかった。彼女は傷を作るような刺激物との接触も、全く心当たりがなかった。

ローナの子ども時代について話し合うと、違う種類の傷跡が明らかにされた。両親は彼女の健康な成長と発育を、侮辱とみなしているようであった。それは彼らが虐待する傾向を、最悪のものにした。彼女が混乱して不幸な時に、または身体的な病気の時だけに、彼らはやっと最低限の世話と支援を思いつくのだった。

「痛みは助けをもたらす」ということが、成長する間にローナが学んだレッスンであった。強烈なストレスに見舞われた間に、それは結婚の破綻であったが、彼女は知っていた唯一の方法で助けを求めた。ローナがついに白状したところによると、ヘアピンで身体に傷をつけて、自分自身で皮膚に傷をつけていたのだ。

ローナは遠い目標に向かって、まだ心理療法を受けている。しかし治療に深く関与しているので、成功する見込みは十分あるように思われる。

7. 皮膚は忠実である

私たちの人格は、普通はモザイクのように発展する。影響力のある人物を真似た大小のかけらで、私たちはスタイル、身ぶり、態度の収納庫を築いて、自分自身に組み込むべく準備しているのだ。これは私たちが愛し、賞賛している人たちとつながりを作る健康的な方法である。私たちの母や父は、声の調子や言葉遣いに取り込まれて、私たちの生涯にわたって生き続けるかもしれない。

私たちはしばしば、他の方法で親に忠実であり続ける。親が私たちをどう見ていたかを受けて、彼らの目に映っていた自分でいようと努力するのだ。これははっきりした道筋をたどる。親が私たちを好ましく思った時には、結果として自尊心と達成感をもたらすのだ。しかしもし親が私たちをあからさまに醜く見れば、その観念と自分を同一視して、服装や行動がその通りになるよう、否定的な見方に忠実であり続けることも可能である。見た目を損なう皮膚の荒れは、すぐにこの作戦の兵士になれるのだ。

同じように、親の特徴と自分を同一視しようとする正常で健康的な過程は、困難をも引き起こすことがある。親と気持が通じなかったり、親が姿を消してしまえば、この同一視の過程はすさまじい、頑固なものになるかもしれない。愛されていると感じる唯一の方法は、自分の親そのものに「なる」こと

である。

子どもは同一視する時には鋭く察して、自分の親にとって本当に大事なことを標的にする。もしパパがヤンキースのファンなら、そのチームにぞっこんになるのは、好意的に注目されるのに良い方法だろう。同じように、もしパパが蕁麻疹の治療に大いに時間と労力を注いでいるなら、蕁麻疹は親密さへの鍵であるとのメッセージが容易に伝えられるのだ。

何組かの家族が一緒にピクニックに行けば、傷んだ皮膚の手当をすることで皆が親密になるのは、間違いない。ある種の皮膚の荒れは、遺伝的な構成要素を持っているし、乾癬はその一つである。偽遺伝は、この生物学的な要因を誇張——素因を確信に変える程度であるが——できるのだ。「なさぬ仲」の育ての親から病気を受け継いだ場合は、偽遺伝の「偽」が明らかである。フランケルとミシュは、この問題のある男性を首尾よく治療した。

《フランク》

37歳のフランクは寂しく、孤立した男であった。彼は絶望的に内気であり、ここ15年間はひどい乾癬に苦しんで来て、他人と関係を持つ社会的な能力や感情は良い方に向いていなかった。

フランクが大学を卒業してまもなく、その障害はひどくなっていった。彼はその時期について、これまで自分を支えてくれて父親のように優しくった唯

一の人である、聖歌隊の指揮者と別れることになったので、特につらかったことを思い出した。フランクがこの人もまた乾癬にかかっていたことを思い出したのは、治療が始まって間もない頃であった。

病気をひどくすることによって（彼に遺伝要因があったのは疑いない）、フランクはこの哀れみ深い人物との親密で慰めに満ちたつながりを維持したのだ。それは、他人と打ち解けて交流することへのリスクと不安から免れさせてくれた。

8. 皮膚は記憶している

私たちは通常は言葉やイメージ、音、そして匂いを、意識が引き出せる形のまま脳の一部に記録して、何が私たちに起きたのか、単に「憶えて」いる。しかしそれがあまりにショックが大きかったり圧倒的であったりして、その人の価値観や感覚にそぐわない場合には、そのメカニズムが扱える限度をすぐに越えてしまうのだ。過度の情緒的な負荷から保護される必要にかられると、私たちはそれを否認して意識の下に隠そうとする。

極端な例は記憶喪失である。誰かが恐怖と苦痛に満ちた危機に猛攻撃—例えば友人の変死—された時には、精神的なブレーカーが落ちて、その場面の全ての記憶が意識から消えるかもしれない。私たちはそれよりは外傷的でない経験も、選択的に忘れる（繰り返された体験のパターンを含む）。これは生涯にわたって起こるのだが、まだ言葉で記憶されるには早過ぎた出来事には特

に起こりやすいと思われる。

それでも、記憶（とりわけ、それに属している辛い感情）は立ち去らない。それは表面に出る道を執念深く見いだす。このようにして、多くの神経症的な行動が始まる。ある男性は母親が利己的で脅えた女性だったという不愉快な記憶に直面するよりは、つきあった女性たちが同じやり方で彼を扱ってきたことを発見し、母親の真実を行動の中で思い起こすかもしれない。ここには辛い歴史をハッピーエンドに書き直そうとする、別の試みがあるのだ。

記憶は、姿勢と動作からうかがえる場合もある。ある人の呼吸法は、幼い時に「息苦しかった」事実を、カプセルに包み込むことができる。心身症の症状は、直接に向き合うのが情緒的にあまりにも困難な出来事やパターンへの、象徴的な記念碑かもしれない。

《ビック》

皮膚科医のマイケル J. スコットは、著書「皮膚病とアレルギー疾患における催眠」(Hypnosis in Skin and Allergic Diseases)において、不可解にも旅客機である峡谷の上を通るたびに、額にヘルペスの水疱を出したベテランのパイロットについて述べている。

彼は催眠療法（催眠のトランスに導かれる心理療法）で、峡谷が彼にとって

特別な意味を持っていることを思い出した。そこでは同僚で友人だったパイロットが、墜落して亡くなっていたのだ。病気で家に居なければ、彼自身がフライトしていたはずだった。そのパイロットが友人の死で感じていた、埋れていた悲しみと罪責感を味わうように自分に許していったら、ヘルペスの発生は消えた。

9. 皮膚は禁じられた真実を語っている

赤面はよく無垢な純潔と結びつけられるが、私たちはしょっちゅうしているものである。お決まりの赤面は、若い女性が「うぶでわからないはず」の、きわどい冷やかしの冗談を耳にした時に起きる。彼女はそれをわかるからこそ、顔を赤らめるのだ。彼女は周りから思われているよりもいっぱい知っていて、顔への血流の突進がそれをばらしてしまう。

かすかなヒントと徴候によって、多くの親は子どもたちに命じる。ありのままにいないように、感じるままに感じないように。愛情と尊重への欲求は、その執行人である。私たちは情緒的な飢餓への脅威に対して、身を隠すか向き合うかしているのだ。もし自分を偽造する術が板につけば、私たちは真実を自分自身から、そしてその他一切から隠すことを学ぶ。自己イメージに合わない感情や思考は、消えてゆく。両親から真実を隠すことを学んだように、私たちはもっと怒っているとか、貧しくなったとか、性的に興奮しているなどと感じてゆくよりは、自分に感じさせないようにするのだ。

くり返すが、情緒に属することは、抑制はされてもただ干あがったり、消し飛んだりはしないものだ。私たちが否認する真実は、しばしば語るために自分で身体を通して表面に上ってくる。

皮膚は身体の最も大きくて見えやすい器官なので、真実を語るために指名されるのは自然なことである。それは私たちが顔を赤らめる時のことを思えば、明らかだ。「すべてが素晴らしい」という基本方針のもとに訓練された人は、荒れ果てた顔にのみ内面の混乱を示すのだろう。時にはサラの場合のように、皮膚は象徴的な言葉遣いで、その禁じられた真実を口にするのだ。

《サラ》

30歳のサラは長男を難産した後まもなく、最初の「神経性皮膚炎」に見舞われた。その子は腹痛で昼も夜もひっきりなしに泣いたが、会計士の夫は全く何もしなかった。彼の反応は、自分の家庭には何の騒動もないふりをして引っ込んでいたことだった。

サラは夫の消極性を打ち破ったり、必要としていた支えを彼から引き出せなかった。その上良き妻、良き母であり続けるとの誓約が、彼女をその状況に閉じ込めていた。彼女の発疹は、左手の中指から小指にかけて広がって行った。それは段々にひどくなって、結婚指輪を切り離す必要にせまられた。そ

れはタブーの象徴的な実現であったが、妻と母の座から逃れたいとの心からの願望でもあった。サラが皮膚炎の情緒的な論理ひとつを理解するのに数年かかったが、それはついに彼女が気力と気づきを蓄えて不満足な結婚を終えた時だった。

10. 皮膚は時間を止めようとする

ある患者が、初孫を身ごもったという知らせを自分の母親がどんな風に受け取ったか演じてみせた。「何てことをしてくれたの？あなたは私をおばあちゃんに、年寄りにしているのよ」そのみっともない嘆きは、家族の心を打つだろうか？ 私たちは時間をかけて夢を実現するが、時間が過ぎていく中で喪失にも苦しむのである。大きくなって、年を取って、死んでいくように。

時間の喪失は早い時期から始まっている。大きくなった子どもは、幼い頃に受けていた親密な養育を失うのである。青年期は自立と、ぞっとするような責任をもたらす。

時間が過ぎ去る恐怖は、いくぶん元気を凍りつかせて麻痺させる。大きなトラウマは、解決するのに時間がかかるように、体内時計を停止させるかもしれない。人生のうちで欲求が満たされていなかった時期については、私たちは決算するのにためらいを感じる。忘れられない負債が残っている時代については、情緒的な帳簿の合計を出さないようにするものだ。

親というものはかわいいちびっ子が成長してゆくと、落胆してしまうものだ。もし彼らがその落胆を言葉巧みに表現するならば、子どもは無意識のうちに「いつまでも幼い」ままでいて、期待に応えるであろう。

「お前は本物の大人の世界に入っていけないだろう」と教えられた子どもは、恐怖のために身動きできなくなるだろう。彼は心の底では、月並みで地位の低い仕事こそがお似合いだと感じているために、昇進をぶち壊しにするかもしれない。両親への誇張された忠誠のために、彼は一人前になって年を取っていくことを無意識に拒絶するだろう。

そういった人々には、しばしば奇妙で矛盾した若々しさがある。彼らは身分相応の服装をしているのに、ひどく少女っぽく見えたり、少年っぽく見えるのだ。戦い続けるしんがり軍への皮膚の関与は、青年期を過ぎた人たちのニキビ面に端的に現れるが、その「10代の」皮膚は彼らがまだ青年期の葛藤につながれていることを示している。

《ステラ》

22歳のステラは手指のつめの下のイボで注意散漫になり、歯科衛生士の仕事を辞めることを余儀なくされた。したがって彼女は初めてアパートを借りる代わりに、両親の家に留まって、通りの向こうで事務員として働くことになった。

これはステラの人生で、唯一の応急処置ではなかった。彼女は異性関係でも、不連続きのようであった。どの男性も初めは思いやって世話をしてくれるが、すぐにののしって屈辱を与えるのだった。

「私はまだ、高校生のようにしていきたくはない」とステラは嘆いた。当惑させられるのは、それだけではなかった。家に居ることは、言い争う両親の調停役をいつも務める母親の召使という、青年期の役割に逆戻りすることを意味していた。

ステラは治療の中で、実際は彼女と両親の願望を満たすように皮膚が介入していたことにすぐに気がついた。—彼女には成熟した関係を持つように試みることを、両親には末っ子が巣立つのを眺める心痛を、それぞれ免れさせるために時計の針を止めていたのだった。この気づきと催眠療法によって、イボはすぐに消滅した。

11. 皮膚は世間にあなたが完璧ではないと言っている

親の瞳の輝きは、子どもの合理的自尊心—自分の価値に対するしっかりした健康的な感覚—の原料である。しかし親によっては、簡単に自尊心のようなものを獲得できないために、合理的自尊心を育むことができないのだ。彼らの子どもは成長すると抑うつ的になり、自分に我慢がなくなる。自分の長所や強さを、実感することができない。

子どもの成果をほめすぎる親は、合理的自尊心を促進するよう見えるかもしれないが、親自身のか弱い自我を持ち上げるためにそのような成果が要求される時は逆の結果をもたらす。しみ一つない爪とオール5の通信簿で完璧な娘であるとか、文武両道に非の打ち所のない息子であると強調するのは、子どもの真実を否定しているのだ。彼らが完璧でないなら、自分をゴミのよう感じて育つだろう——しかしながら完璧な人間などいないのである。

健康な自尊心を発達させられない子どもは、大人になっても両親が育てようとして失敗した人物を装うであろう。いかに自分の仕事等重要であるか、子どもが優秀であるか、家と車が素晴らしいかをまくしたてる、うんざりするような人物がいるものだ。その振る舞いは張り子の虎のようなもので、本当の自尊心の風刺画になっている。

これらの人々はまた、注意深く作り上げてきたイメージだけではなく、自分にはもっと色々あることをかすかにコミュニケーションしたい欲求を持っている。彼らの皮膚は、メッセージを運ぶように頼まれるかもしれない。

《ランス》

23歳の時に、彼はニューヨークでも売れっ子のモデルだった。しかしながら彼のほとんど完璧な顔は、意地悪なことに検舞台の直前に吹き出たニキビで台無しにされた。

ランスは男兄弟の末っ子であった。彼らはそれぞれ、抑うつ的なアルコール

症の父親に置いていかれた母親から、気持の隙間を満たすように押しつけられてきた。誰もが失敗してきた。勇敢にもランスが彼女のチャンピオンになろうとして、高校ではスポーツに優秀でいかにもそのように見えさせた。しかし肩の重荷に一番弱いニキビが、くり返し表面に出てきたのだった。

母親は彼に成功するように励ます一方で、絶えず沈黙のうちに小言を浴びせてきた。「離婚して貧しい母さんがみじめでいる時に、あなたはよくそんなにも若くて幸せで成功できるものね」ランスのニキビは、免責を求めて叫んでいたのだ。「僕にしたって、完璧じゃないよ。つらいんだ」

私はランスがボストンから招聘先のヨーロッパに向かう途中で、ほんのしばらく会っただけである。数ヶ月後に届いた葉書では、私が教えたテクニックで良い結果を得ているとの報告があった。

私たちはみな、複雑に入り組んだ情緒的な欲求をごちゃまぜに抱えている。皮膚の荒れが一つのパターンや解決法で軽くなり得るというのは、性格が一つの特色しかない人と同じくらいの絵物語である。現実の人が耐えている現実の発疹は、これらのパターンのいくつかを含んでいるのだろう。あなた自身の症状について考える時に、最も適切に見える一つ二つの作業を選び出すのは理にかなっているが、教わるのが何もなくても一つとして忘れ去らないで欲しい。

これらのパターンが、決して成長や感情を隔離していかないように、ほとんどの皮膚の荒れは一人の人間の疾病としてよりも、関係性の問題として理解されるのが一番良いのである。例えば幼児湿疹は、一般に赤ん坊と母親の間の困難を意味している。成人期に入れば、ただの配偶者から母親に役割が変わってくるのだ。

皮膚疾患は、あなたと外界との境界における危機を意味している。潜在的な課題を解決するには、あなたがそれらとどう関わるのか、変化が必要なのかかもしれない。しかしながらまず第一に、あなたは皮膚の下にある自分自身を、ありのままに理解するのを学ばなくてはならない。



傳田さんは、わたしたちの指の表皮に存在する神経はまばらなのに、1 ミクロンの差を察知できるのは、神経ではなく表皮細胞自身がセンサーとなって情報を読み取っているからだ
と書いています。触診による診断、手指による体表観察は、日本鍼灸の固有性ですが、そ
れを可能にしているのは皮膚の力であり、神経の力ではないというわけです。神経は、皮
膚が処理した情報を受け取り二次的に作用しているようです。

ダマシオ博士の、「情動や感情を生み出すのは脳と身体 of 相互作用であり、脳だけでは感情
も理性も生まれぬ」という言葉を引用しています。

経絡に末梢・中枢神経が関与していることは間違いないと思うが、体の表面において、表
皮も独自に帯状の電氣的に特異な道筋を形成しているのではないか。その制御に神経系が
関与している、という経絡像を今はイメージしています」と書いています。

指の皮膚から吸収され偶然に幻覚作用が発見された[7]。幻

皮膚移植

私たちは、今、当たり前「服」を着ています。衣服が身体を物理的に守る意味を持つ
のは明白としても、衣服はすでにそれ以外の意味を持っていますね。

北山

衣服には3つの機能があると考えています。まずは、純粋に生理的、物理的な機能。怪我
を避けたり、暑さ、寒さを防いだりするために身を覆うものとしての衣服です。

二つ目は、自然と人間界との「境目をつくる」という機能です。大昔から、人間にとって
自然と自分達をどう区別するかはとても大事なことでした。しかしその「自然」は、外側
にのみ存在しているわけではありません。人間の体自体が、自然に属するという考えがあっ
たからです。昔の人にとって、突然病気になるたり、生理的な反応を起こす「体」は、訳

の分からない未知のもの。そこで、衣服を着ることで、自身の体と自然とを区別しようとしたのです。香水や化粧、更に刺青や癍痕と言われる顔や体への彫り物なども、自分達はその「体」をコントロールし、体を文明に引き寄せようとする意味合いがありました。自分の体に人工的な手を加えることによって、人間の体を自然のものでなくて、人間世界のものだと確認していたのです。私は衣服のこうした機能を「文明的な機能」と呼んでいます。

三つ目が社会的機能です。以前は、集団ごとに生活のさまざまな規則が定められていましたが、衣服もその規則に基づいて、形や色、素材について厳密に決められていました。つまり衣服は、社会的な属性を示すもので、そこでは個人が自分の自由意志で衣服を着るということはありませんでした。

――

それが変化して、今のように誰もが自由に衣服を着られるようになったのはいつ頃なのでしょう？

北山

衣服を選ぶ自由というのは、個人主義の台頭と大きな関わりがあります。

個人主義以前は、個人は共同体に埋没していて、一人一人の人生は全体にとって意味をなさなかった。それが近代に入る少し前、個人の人生に意味があるという個人主義の認識が広がり始めました。そこでは自分の人生を自分で決める、つまり自分の人生は自分で守らなくてはいけないのです。これは人の自我にとって非常に大きな転換です。

「封建制度の社会から人間は解放された」と言いますが、「解放された」というのは一面的な見方であって、逆に言うと、共同体が個人の責任を取らない、ということ。自分の人生の責任は自分で持たなければならなくなったのです。そこで私達は、周囲とどんな関係を持つか、社会の中で自分はどのような役割を持つのかを常に考えざるを得なくなりました。衣服もこうした状況の中で、それまでとは違った意味を持つようになりました。衣服が、個人の存在を表象する道具になったのです。

北山

服を選ぶこと自体は非常に些細な行動ですが、実は社会の中で自分をどうやって位置づけていくかという問題と重なっています。服を選び、それを着るという行為は、社会の中でどこに自分を置くのかという意志を示すものでもあるわけです。

これを「身体表象」という言い方をしますが、私達は自分の存在、身体というものを社会の中でどうやって表現するかという行動を、服によって実現しているとも言えます。

――

そうして考えると、単純な服選びや流行、ブランドブームなどが、「風俗」というだけではない、個人の根本に影響を及ぼしているのですね。

北山

そうです。そして、衣服が他者と自分を結びつける道具であるならば、つまりそれはアイデンティティの問題に繋がります。

今、しばしば「アイデンティティの危機」という言葉を耳にします。「自分が何者であるか分からない」という人がたくさんいます。本当は「自分が何者か」なんて誰にも分からないものなのですが、今の社会は「自分を分からなければいけない、本当の自分を確立しないといけない」という強迫観念を持っています。

――

そうした問題と今の社会の衣服へのアプローチには、何か繋がりがあるようですね。

北山

自分のアイデンティティをどう確立し表現するか、という問題が、今ほど熾烈な形で、日々自分の行動を左右してしまう状況はかつて無かったと思います。そうした時代では、自分を表現するという役割を担った衣服は、非常に重要な意味を持つようになりました。暑さ、寒さをしのぐという物理的な問題は二の次になり、自我の問題と衣服、つまりは身体表象の問題が直結するようになりました。衣服の社会的機能の新たな展開です。

--

今、プチ整形などが流行っています。衣服が皮膚の延長と考えると、それも一種の身体表象ということでしょうか。

北山

昔だったら仮面をつけるとか、化粧を厚く塗るとか、顔の造形を変えるのはたいへんだっ
たし、美容整形にしても最近まで大がかりな手術と決意を必要としていたわけですが、今
は「プチ整形」などと言って簡単にできるようになった。衣服やアクセサリーと同じ感覚
です。整形もまた、自分のアイデンティティをどうやって外側に向けて表現していくか
ということに結びついているんです。整形をした人が「自分だけが満足すればいい」と言
いますが、あれは真実ではないでしょう。自分がそうなったことを、社会の中で認めて
もらわなければ済まない。頭の中には、社会の視線が入っていて、自分がどう見られて
いるのか常に比較しているはずなんです。

衣服も身体加工も、根底には、同じようにアイデンティティの問題が横たわっています。
現代は、精神的なレベルでの自己確立ではなく、それこそ身体加工も含め、商品を購入
する、ものを消費することによって自己確立をやらざるを得ないという面もあります。衣服
はその最たるものです。

では、何が作られ、何が売られているかと言えば、結局イメージなんです。今売られて
いる「モノ」からイメージを除いたら、何の意味もなさないものになってしまう。イメージ
があるから商品として成り立っていると言ってもいいでしょう。なぜなら、イメージ商品、
例えばブランド商品は、自分のアイデンティティを社会に向けて表現していく行為を効率
的に実現してくれるような品物だからです。だから高くても買われることになるわけです。

--

今、「自分探し」という言葉がありますが、ブランドブームや、プチ整形の底辺に「自我
の確立」への強迫観念があるというのは興味深いですね。

北山

身体表象や衣服が自己確認の方法になったのは、最近の 150 年か 200 年程。しかし、その間に「自己確立、自己確認」は、それ自体が人生の大問題になってしまいました。一方で私達は、自分の表現する自己に完全に満足できなくなっています。それが衣服への執着、さらに整形へとシフトして自分の存在を表現しているのですね。衣服が担っていた機能は、さらに拡大しているのです。

—

衣服は、私達が普段考えている意味を遙かに超え、その人の存在を表現する道具として、私達に影響を与えているのですね。

インタビュー 飯塚りえ

北山晴一（きたやま・せいいち）

1944（昭和 19）年生まれ。立教大学文学部・大学院文学研究科（比較文明学専攻）教授。東京大学文学部仏文学科卒業、東京大学大学院人文科学研究科修了。

主な著書に『美食の社会史』（朝日新聞社）、『ヌードとモードの間—欲望の考現学』（日本経済新聞社）、『官能論』（講談社）、『衣服は肉体になにを与えたか』（朝日新聞社）などがある。

撮影／海野惶世 イラスト／小湊好治

月刊誌スタイルで楽しめる『COMZINE』は、暮らしを支える身近な IT や、人生を豊かにするヒントが詰まっています。

[サイトご利用条件] [NTT コムウェアのサイトへ]

—

—生体の非因果律—について

シュレディンガーによれば、生体は環境から負のエントロピーを取り込み、正のエントロ

ピーを放出して内部環境の秩序を維持しているシステムである。

ブリゴジンの開放系の熱力学では、エネルギーや情報が入り出りできるシステムのなかでは「自己組織化」が生じる、すなわち無秩序から秩序が立ち現れる。ここでも因果律は成立しない。

因果律の支配する閉鎖系と異なり、生体におけるような開放系システムでは因果律は成り立たず、その内部環境では、逆因果律とでいうべき現象、すなわち未来が過去を決定する、という原理もありうるのではないか-渡辺慧説-。時間の流れが存在しなかったり、あるいはその方向がわれわれの常識とは異なっている可能性がある。

生体内、とりわけ複雑な構造をもつ大型動物、そして人間の「精神」には、多様多彩な「時間の矢に逆行する」現象が隠れていることだろう。

皮膚は生体にとってその内的「非因果律的」世界を維持、発展させる境界であり、過去から未来へと流れる外界の時間の流れから、「未来から過去へ」流れる世界を護るシステム、なのだと。

<連句の世界－安東次男「芭蕉連句評釈」より>

「狂句こがらしの巻」－16

たそがれを横にながむる月ほそし
となりさかしき町に下り居る 重五

また、天才と呼ばれるピアニストなどは「脳」ではなく「手の皮膚」で演奏しているのかも知れません。指の動く早さは、頭で考えていては追いつきませんから。

つまり、「脳」という機能は全身に分布しているのです。

では、心と体の関係、とても深い世界を考えるきっかけになった興味深い本です。

なお、女性はミクロンレベルの不規則を嫌う、という記述がありました。女性はミクロンオーダーでランダムに配置した溝を不快と感ずることができそうです。そうすると、匠とよばれる名工には、女性の方がふさわしいのかな？

ログをリンクに追加する

次

膚は未知の思考回路である

皮膚とは何か／防御装置としての皮膚／防御装置をコントロールするセンサー／感覚器としての皮膚／女性の指先はミクロンレベルの不規則を嫌う／触覚の錯覚／色を識別する皮膚

第二章 表皮は電気システムである

脳と表皮は生まれが同じ／感じ、考える皮膚／表皮は電気システムである／表皮細胞は電波を発信している／皮膚が老いるということ／痒い！

第三章 皮膚は第三の脳である

第三の脳宣言／背中を搔く無脳カエル／自我をつくる皮膚／編在する脳

第四章 皮膚科学から超能力を考える

東洋医学再論／皮膚科学から超能力を考える／眼以外の「視覚」／目利きの本質／気とは何か／テレパシーあるいは以心伝心

第五章 皮膚がつくるヒトのこころ

環境と皮膚／アトピー性皮膚炎私論／こころはどこにあるか／皮膚がつくるヒトのこころ／こころと皮膚／こころを育む皮膚感覚

第六章 皮膚から見る世界

皮膚の変遷——カエルからヒトへ／ヒトはなぜ体毛を失ったか／はだかの意味／顔の皮膚／境界としての皮膚／「非因果律的世界」を護る皮膚／皮膚が見る世界

この現象は通常「視覚に代わって別の感覚が発達し補っている」と説明されるわけですが、不思議なことに、生徒たちにハチマキをさせると途端にコースを認識できなくなり、競技そのものができなくなってしまった、というのです。

博士が彼らに聞くと、うまく説明できないが、額、つまりおでこでモノを「見て」いるので、ハチマキされると「見えなくなって」困ると言うのだそうです。

この現象について、いくつかの解釈が慎重に提示されるのみなのですが、「表面を覆われ

ることで妙に感覚が鈍る」というと、武術・格闘技のことを連想してしまいます。

わたしの乏しい経験の範囲内では、防具を付けることによる「遮断」感があります。

防具組手を取り入れている打撃系格闘技の経験者なら誰でも知っていると思いますが、面の類を付けるとびっくりするくらい感覚が鈍ります。これには「視界がせまくなる」「防具の重み」「間合いが変わる」「呼吸しづらい」などのすぐにわかる要素があるため、「皮膚感覚」に還元することは当然できませんが、キャッチャー面のような正面が空いたものと、スーパーセーフやアルファ面のような透明プラスチックの正面ガード系で、明らかに影響の仕方が違います。

慣れでかなり適応はするのですが、特にスーパーセーフを付けていると、「見えて」いるのに反応できない、ということが何度かありました。蹴りのモーションなどがはっきり認識できているのに、身体がついてこないでまともに食らってしまう。すごくイヤです。

逆に反応できているときは、必ずしも「見えて」いるものではありません。スポーツ一般に、うまくいった時のことが「よく思い出せない」「説明できない」ということはよくあるでしょう。大昔に一度、先輩とのスパー中ハッと気づくとキレイにミドルをキャッチしていて、あまりの意外さにどうしてよいかわからず、そのまま床に戻してあげてしまい怒られたことがあります（笑）。

まあ、本当に強いヒトは、そんなこと関係なく強いわけですけど・・・。